

土佐清水市の民俗伝承(3) 「貝ノ川ヘイチャン踊り」

市史編集委員 岩井 拓史



大月町春遠付近に源流をもつ貝ノ川川の河口に位置し、954メートルの貝ノ川トンネルを抜けると市最西部の大津に入る。貝ノ川にも海岸部「浦」と山間部「郷」の二つの集落があり、令和4年4月時点で82世帯207人が住む。市内の中でも高齢過疎化が特に著しい地域である。明治42年(1909)8月、浦壮義団(青年団)のサンゴ採取船が台風により遭難し、11名が犠牲となった悲史がある。

ヘイチャンは郷に伝わる花取踊りの一種で、この呼び名は貝ノ川独特のものである。掛け声の「ヘイ」に太鼓の音「チャン」が続くことが由来とされ、他地域の花取踊りに比べて、跳ねる動作が大きいのが特徴である。

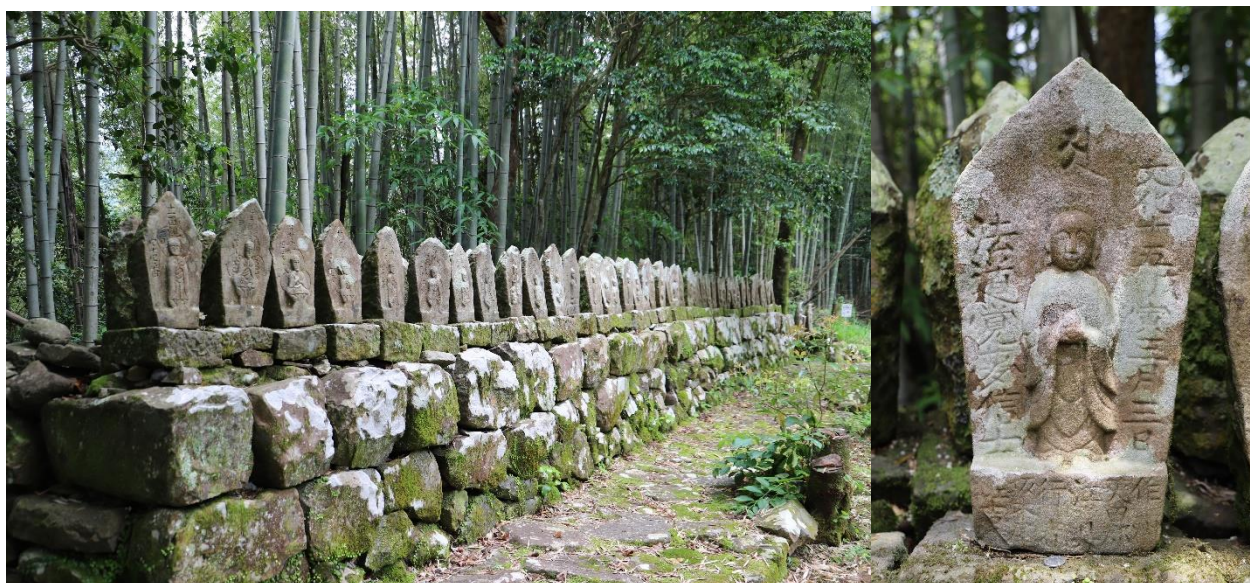
古くから豊作を祈願して、天満宮の秋祭りで奉納されてきた。昭和30年代までは地域の青年団員が担い手となり、最盛期は40人程がいた。当時、郷の青年がヘイチャンを踊るのは当たり前のもので、代々受け継がれてきた芸能である。郷と浦が競い合うように神輿を出すなど祭り自体も大変賑わっていた。

しかし、高度成長期後半の昭和40年代に入り、集団就職や進学で地域を離れる青年が急増し、担い手が激減した。その後、小中学校の児童・生徒が運動会で踊るのが主流になったが、平成21年(2009)、貝ノ川小学校の休校とともにヘイチャンが地域から消えた。平成13年9月に発生した高知県西南部豪雨災害の被害により、農家が減ったことも一因となった。

若者や子どもが激減し、限界集落の一途をたどる貝ノ川。代々伝わってきた芸能にもう一度光を当てようと、有志の呼びかけに浦の住民も加わり、平成 27 年に復活した。現在、幼児から 70 代までの幅広い年代が担い、地区あげての体制で秋祭りに披露している。

- 伝承組織 貝ノ川地区
- 実施期日・機会 毎年旧 9 月 9 日前後の日曜日
貝ノ川天満宮秋神祭
- 実施場所 貝ノ川天満宮

「真念庵の物語(3)」 「境内所在の四国八十八か所写し霊場」



境内には、「四国八十八か所写し霊場」がある。廃仏毀釈による庵の荒廃を復興したのは、法印實道(俗名松本伊蔵)である。境内の写し霊場は、明治中頃に實道と市野瀬住民が協力して造りあげたと伝わる。現在の市野瀬区長沖上芳幸氏は、祖父鹿太郎氏からこの写し霊場の石仏を四万十川の右岸河口部に開けた初崎の港から、伊豆田峠を背負子に背負い、一躰一躰大切に運んだと伝え聞いている。この写し霊場の 23 番と 24 番の間に形状の異なる供養塔が 1 基配置されている。文化 15 年の銘で「作州英田郡江見行者坂木屋佐吉」と記されている。なぜ写し霊場に坂木屋佐吉の供養塔がおかれたのか詳細は不明であるが、堂守墓域にも墓標があり、そこに埋葬されたと考えられることから、庵に何らかの功績があったのではないかと推測される。



真念庵南側に古い集落墓地があり、その一隅に歴代真念庵堂守の墓碑が集積されている。その墓地北端の上部にコンクリート製の覆屋があり、その中に台石上に地藏菩薩像が立つ姿彫型墓標が置かれている。そこには「真念庵主(正面)」「明治廿五年 八月廿八日(左側面)」「松木伊蔵(右側面)」との銘がある。廃仏毀釈の荒廃から真念庵を復興したのは、この松木伊蔵こと、法印實道であった。